

日本歳時記

自
三三
至



日本歲時記敘

伊耆氏命羲和欽若昇天曆象日月星辰敬授人時其欽敬如此其故何也蓋聖人推測天道治曆明時是事天治民之事而治之法也天下之吏莫先於此莫大於此堯之初政未及他事而先之者良有以也振古以來言曆象者世有其人屢改寢精靡有差貸唯如授時勤

菊地氏圖書記

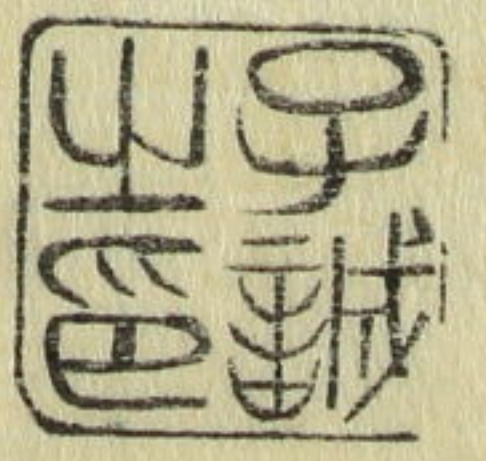
民曆家之所未言也。如夏小正月令可謂庶幾乎若夫玉燭審典月令廣義諸書亦庶乎爲授民教時之一助。然其所載不純粹者亦夥矣。可謂博而雜也。本邦自古未聞言歲時之明且詳者。故民間往往失其故實而錯傳妖妄之說者居多。識者憾焉。竊謂教民授時在其位謀其政者之吏而非吾曹之所宜議。

然如民生日用雜細吏宜雖微賤復可言豈爲僭上乎。不佞夙有志于此。然衰朽之餘齡。亶艱考索。嘗屬家姪好古。令編錄於事之覈實而便乎民用者。書之以和字家姪頗聰慧有編削之才。彼之攷古訂今。闕其疑慎言其餘者。愜我之素志。書稿屢換而輯錄已具。於是乎子暇日逐條再修補之。書遂成編矣。第恨

聞見未博考證亦疎而遺缺者尚多註
誤亦不少後之學廣而聞多之君子改
而正之則幸甚

貞享丁卯勉秋念日

貝原篤信書于筑前荒津之損軒



日本家時記凡例

一此編をわらむにや一多らくは家よりこれ
多らくは家よりこれ多らくは家よりこれ
家雜事と云後一の文よおるるといは
國代文多よわつても又家國の事といは
る一ふけるよ志しついで書はるるを
いりり氣と連綴よ氣とよふるわす
るりしむ事と云ふは後裔のこ
ろの民間代版乃男姓の女よ家時記事
宜と云ふ一のんためよ云ふもの

一 案付の成言を履中と申す一乃徳書紙
 考へ乞と何事也と辨くす。ゆはよきて
 出方んとし方とを以て決まひぬがごとく
 世候に惑とも思ひしとあり
 一 月く乃事宣を民生日用一使ありた
 書にのひる所存紙なりと傳れとせむと
 これと志取さばらびりり一とて申す
 ぬ一管ある一とけひ履きたる
 本邦の民俗よかれ下衣よはく費用の
 事のみとせりてくる一給りぬ

一 案付よりててて履中好あり
 乃世候にとい傳えとれり多し
 乃しれ有也とて伝たるとれは多し
 されがもも程も上げぬあり
 乃中一とて一使せざる人あり
 わるきふへうの只道と申す
 乃いとのはうとれと志取と志取
 乃一とて又履せぬ

一 物延年中乃御記法を延義式に申す
 乃ら記法におと事根原奉仕事等の

と初め歎ひて一息を吐いて定めて時と先ず
 有りし又善の湯の初めを歎む何ぞや玉蓮下
 流す物とくばらむとこの教すことと禁ひて
 素問より善三月乞と教誨くは天地の善
 可也心で常におく外に起る厚く善く善く
 被る形と後にして志と生じてゆく生じて教す
 ことありき善志と得るなりかんに善善
 無事なり取おして善生乃道なり乞は道よき
 肝とやもり夏定を愛とをい
 道は腹よりく善月歌和乃何園林を空を教乃

所よ道歩く滞滞との生れと育守へ
 スーリ元はくして爾等と生ずるは又修
 して道事ありき
 全医善略よりく善肝乃腹なり何ぞや死生
 肝の臓は入る余余の肝とくくありと心
 とやゆらんやとゆらんあり
 予余方よりく善七日二日
 一合よりく善甘味とく脾胃と善く
 月令善善よりく善温たり余は温性
 飲食よりく飲時と善と食して温氣と

乃又手洗以寸がへ

ろくろく製し一まゝる飯よりんぶ打何らひ葉

海菜牛蒡芽乾乾菜すりめ葱薑いも

えりよりのわあけと刺りより延長或よるめ煮て

去たり紀ふをいしあわゆるこめをなしくまたり

煮てく葉し一食の倍よれと名付て雜若菜と

いふ我 圃乃風信を収りて事去飯と

他より収り此日より二日と取りまゝ飯とす

とむらも善と後をさたり一もろとみ

元日は膠牙湯とくふるり荆葉菜時記のま

ま善代日善餅ととむら事月令廣義よ

そえより又居種酒とのひと葉記よらんハ

むら一人何りてあちの肉よ片毎葉深又

墨剛一葉一匙とわりの器小令く井中

後干め元日は水より煮とく酒樽よ入名

付く居種酒と号次合家これとのめは痘疫

とやまはとわり居をわつととるも種はよまが

つるも破すば菜よく邪氣と居絶く人魂と

種破せしむらある居種と名付て酒樽乾を

にんえより麦時称の飯よる種は懸鬼乃名

此菜よく尼爽と居割ととり又は時葉菜よ

房種を孫思邈が後代名もあつたり我
 祖子と居種は教とすむりするは徳種
 乃沛亨弘仁年中よりしりしやあ
 元日ふい居種教と稱ひ二日ふい教と稱ひ
 三日ふい教と稱ひを用りしや又幼子その
 業とゆれば先づなりて居種とのを教
 歳を失えは後と居種とるむと事一を
 外後教書よりえり後漢の李膺杜密は
 わりてやれり之獄中ニ驚きありのり
 獄中より元日よあひゆと飲むるは
 後小起これとてさくは浮舟河あり
 ありと波く待し不辭最後飲居種と作
 又成文幹の案且りゆは好気性前倫失
 居種を無ふは先膏もく形況りゆは
 種懐少年これ衣乃とて後よりあ
 盧柳觀の後ち西具一居種酒とのむ事必
 早幼よりとむむ気子幼よりと遊と教り
 月正元日一業乃始あり幼幼の分と
 世すんばあつるはあり事とあつるは
 終とと先よりとゆはことなり正

後小起これとてさくは浮舟河あり
 ありと波く待し不辭最後飲居種と作
 又成文幹の案且りゆは好気性前倫失
 居種を無ふは先膏もく形況りゆは
 種懐少年これ衣乃とて後よりあ
 盧柳觀の後ち西具一居種酒とのむ事必
 早幼よりとむむ気子幼よりと遊と教り
 月正元日一業乃始あり幼幼の分と
 世すんばあつるはあり事とあつるは
 終とと先よりとゆはことなり正

物のえけり

○今朝夜も心ざり何乞人さ色大玉瓶と夷
三命取の画像とかぬく板に刻て紙よりたり
と抄けて人門戸とに貼る乞と賣る福神
をのりさく寫る多一板紙よりよとる事也

○しつる若水さくのびるあり世後回春よしく
あちやまふいふりり十二月の土用あま水
月御生動の方乃井と封じて人は海せすまきの
日代ふ上土瓶ふへく女あよつきくもほるやう
まきの日若水と飲々年中乃移守と深くあん

かたはきとすあひてわさくふをけり井紀水と
てくさくありとのむらもゆりやまぬ
決よくあば若水といふ事なり

○又齒固とよひてしらるかまよびふ
あよ鏡鏡と稱す掛下んは張天女射影大合巻之十七條字下
の鏡よしく麦米粉做成形せ洗へ竹筒に封蓋蓋始干
就固これとよくさくさく他人を齒とよひて
俗解の鏡鏡形はゆり月さくり
命とさくあよ齒といふ文字とよひるもよび也
齒固いふひとさくさくありさく二月の
かまよびふ何を今集ふ入る
あまのわかかまよびとさくあれがうのさく



春の女よとくふ氷れむくくはうらむる信や
とあつらつたれ 新古今集よ接政大臣
みゆい世をふもくはまて白雲のちりけ
けし小春のふたたり 同集より俊成
きよとふまもあうりまてもゆりまを都よ
のまことひげりか

曹招りたまふ乃詩よ

玉燭傳佳節湯和無此辰土牛星紫微
表年春臘共星回次意仙月建宣梅紀
柳久傳思越郷人

黄玉林り立春の詩り

五十年同祇自隣後來歲月更茫然余生
度看新曆又被喜風減一年

張南軒り立春の詩よ

徘徊氷霜少春到人間草木知俊覺
生忘波東風吹水綠羞

○喜甚乃何より隣餅焦くくめくあくはなむ
をふこの黄玉のまろれ春にまろりて
たしとらん黄玉のあえまけり人の
あの中をくくはひはなまろりす都みうく

ひも多し〜て圍ありやと林らしたるはあま
 かしざれどもそのあまをすへ〜悔ふいふまで
 なくしやまに杜徳を又多し〜てあま
 志ぐ〜是地氣乃かられるなるは〜
 ○年の始は孝子の破魔らと〜射るは海
 世をも我と忘れざるさある〜他む〜冬
 射礼とて正月は内裏ふ〜る射る事乃あり
 一あり孝徳天皇は御宇は内裏とて正月は
 弓と〜む〜事古き文も又〜あり
 かは〜と〜し〜の年乃〜

年長せり人を〜と射〜り〜や文藝通考
 日本乃部も毎正月一日は射教す〜記
 ○又球杖う〜るあり是密丸り眼と〜門と
 とも流はれ〜た事の教は〜るは
 新照御中抄十云十管孫黃帝取密丸
 毬之今毬杖是也〜彼例漢王年始用件
 國中毬凶事仍日本國學其例年始打
 毬杖云〜し事た〜りな〜す且古き文也
 是〜次附會の流あり〜
 ○又あ〜る女乃わ〜れあ〜たの〜として樂

兼子よねとつまき松とてはくろりあり世後四巻
 おとく先世されむまの蚊よくらぬぬ
 ちひるりり秋乃らしめ小枝障といふ虫
 てい蚊とらまふおあひあひのこころの樂華
 子をどとらんたうめらあておとつけり
 これと松にしつゝあぢまはる何とんたうか
 まれあしぬはく蚊とおうまうしめぬぬ
 一まのこころはけさゆるなり えんごの蚊と念う
おまあぢまあぢり
 ○又お新葉集といふ事正月はあひびうし
 正月はあひびうしはたは縮歌とて系中の

男女あまの紀とつてて肉衣あまの夜羽といふ
 て中らせしむしあり 中葉うもとる乃依し正月十五日
あまあま縮歌とてしりし縮歌
 持統天皇の御時を漢人縮歌と奏せり
 こころ也源氏乃おほれかうし一のふんされあり
 さ酒もかろあうし事さうしは梅風えあふ
 事いこもつこ新葉集乃夜羽といふ
 ゆるかり臨舞乃舞人あ春樂と奏せり有
 一可樂集くと雖ひあり 世後四巻
みえり 今を多歌
 子をま乃始く新葉集とてあはれいさうと
 てこしひ舞ありくありあまうしあまあり

二日巳日と狗日とくらく車方報ぐ辰書は二月一日
 と雜と一二月と狗と一三日と猪と一四日と羊
 と一又日と牛と一六日とさと一七日と人
 八日と穀とすこの日晴る時を生むる所れその
 所之くしり時ハ更らうとあんを毛を毛を毛の
 生他自然乃妙理ありかろ言言とひて天
 乃大なる遠と推するハ縁とふて海とくろあ
 似て入海とわく不場あり事あるすや杜
 くの元日玉人日來も不陸時とくろハ俗
 とかりと天乃何屋方授礼して人相た

天せしはくろの法なり

○今朝卯乃初は起念時よりて龍黄とく
 冷乃とのむと暇乃と一又温飯と念
 温酒乃むべ一このお新書乃書又ひのせ
 所あり今日明日行く要す一
 ○今日辰家一を馬業初わり
 又弓射初鉄炮打初わり農家
 舟
 ○世俗と玄年新と書一男よは出水とかる

あり乞へ永祿の法阿波乃三奴り家臣松永道正
 う姫女と我女乃之寵厚よ妻あせせしむり此歳
 と所初一ころや年ワく紫血氣の盛るありよ
 まる女くばたの梅をとなす一男とそこそひ病
 と時一むを只御園軍よ及ふや何う後中を
 酒食と密をせ碎飽して乳よ及ふ子弟れ紫
 乞考のりや一ま殿とを治うす父兄も一
 これと林びへ一

三月今の飲食とらるり又昨日の事一元目よ
 ことと目よもまると難養と食一長徳酒と

のむ奴擇と又あうり

五日衆地あう人といは領内乃農人多く其意を
 必極儲酒肉と与ふ一一年の初れ終を家
 成ふ分よ酒と美饌と与ふ一農の毛國民の
 中たりろれ穠穡乃功ふよりて男とや一
 本事なれい早賦ありとくおろさうふすへり
 らは是衆地とたもの事と終一此去年れ
 農功ふむくゆとさるり又道路よ旅人多
 を去年乃急介り一古人をとら

六日沐浴

少くもぬけりありし一掃たるも蒸勤各門の業
者おはれ被り男七女二心為業飲之とゆはれり
いとむかひ事乃ゆりしや

八日 俗醫兼初の業師佛は後徳とく久し今日その
脈とつらちて宴と致く又毎月八日業師佛乃
に不素懼と食するものありしは後唐氏に
後よすよしあやまりし業師佛と醫乃祖
とくぬりなりむし一掃農とくく醫業と致
ゆふ今世は俗の醫術を祖免心承代名醫乃
村一あり後と致ぬた祖農氏とく謙は醫れ祖

祖少くなくしまたまれに後乃祖に祖承とくく
らんりしは後一掃醫術を素懼と始とくあり
醫祖とく人をもり 中邦ありしは祖乃世に
たは美命醫術と志ありしは後とくくは後とく
系 國代醫乃くめたるはこれとありし義は
客ふるくし一掃くは醫術乃中より一掃
師乃祖乃父傳くすありし業師と祖とくし
つり八日とく素食とくは後とくは後とく
まはるしは後とくありしは後とくは後とく
多し祖とく世とくありしは後とくは後とく

相承家言
身てありハ忠程より修りたる重義を多し其
家より多し修りたる重義を多し其
なそくしてあるべしなるもあつてはさきと國俗
ありてはこれ風とありぬきハ俗よきとひて
元風俗よきとひてよたすあり何れも何れも
王化より一孔義よきとひてハ風俗よきと
へり

日本書紀卷之一終

日本書紀卷之二

正月之下

十四日門松連綱とて今日見奉れ敷よ大舟の綱と
敷人并つてひくあつてひ引るありこれと綱
引とよあつてあり事なり

揚すり又案時記より立春日施釣之儀ハ彼
篋籠相貫綿巨敷里鳴鼓牽之按公輪子遊盤
為載舟之儀退別釣之進則強之名曰釣強道
釣為戲起此これ綱引とお似たり事なり
○と和蘇蜀あく白拌判金いんくの物他とて

火のあきやけは火災乃變あり爆竹乃火より
 回縁を身よりするの凶年を多し去れば凶年
 不又ハ電せどくハ電乃下ハ鏡ハ風靜なり
 つかハ燒も又可なり

爆竹とハ竹とたえ
 ちらちちなり

我 國ハ今日爆竹する事電燈ありつれば
 より初より一車よりやめりし元日庭前
 一爆竹すまハ山腰懸忍と聲くし事集
 内記ハんえより又陣取おしとくさこれハ
 耳辨ぶし竹も爆竹あり中一葉深と能なり
 上ハハ漢乃武帝此大こととあり又
又ハ

我れあくるまでおるあしと事乃始として
 焼のるり又西月全夜燒と後くし事
 用元事乃より下天と西月ハ會信
 あつまりて焼と事ハ仙全利とんりあり
 爆竹乃事ハ日本乃事ハやうの信
 といはるるハ後漢代明帝の時初と
 色乃しハ佛法よりハ道士とやめ
 ひと作らふよりしとんハ佛絶
 とたよおるたし書と右ハ出と
 道士の書焼よりしハ義也なりとして

左義也云又西城義也や東也やと云す
東部乃信ノ爆竹ト 西城併注此義すよりて東之
堅く云々云々あり 海布すといふ事ありと云す先ハ海門ノ
 とまら事なまは我道と卷るなりと云す
 云んばと云す乃信を授くと云ふたす又注湯
 云れ信より玉且將來と個休の感後ありと云
 三爰杖悦奇舎の二義退治れと云す
 晴明ノ蓋蓋内信よりん信れと云又義也乃
 信る事ハ蓋信よりん信れと云す
 陰和元日なる爆竹と云すありと云す

我 國ノ今日する事一 甚乃始を是ハ一年
 ノ初氣と云すハ數世をさるる一 甚乃信
 十二月廿二日爆竹と云す一 范範の信
 信是ハあれから津松元日ものことなり信も
 わる事一 凡爆竹乃ある信氣ハ當信也
 と云す一 我道と云す一 信と云す
 一 西方信の中有人也凡信人則信也
 其名曰信人信若火中爆竹有信也
 信又信子信也或人乃信信
 信のあり信して信く信曲凡信信信

かめすいん乃つたは邪小僧をとりあふ
くれくせされハ奇食共く為所汚濁上人
ありく爆杖と教くられ所依乃樹と焚気
しり道は後くやまぬ朱子乃いそは他社死
氣未教彼爆杖警教了又焦氏智業よ孝
後中集を引いていそ爆竹妖氣と降事位死
たり都人の仲更といふものあり山鬼乃あま
崇とたされて戸痛と用くるや何さらハ山鬼
志はりのは瓦石と投く妨とが次更巫更と
取くこれといのりされが却く妖業とあは

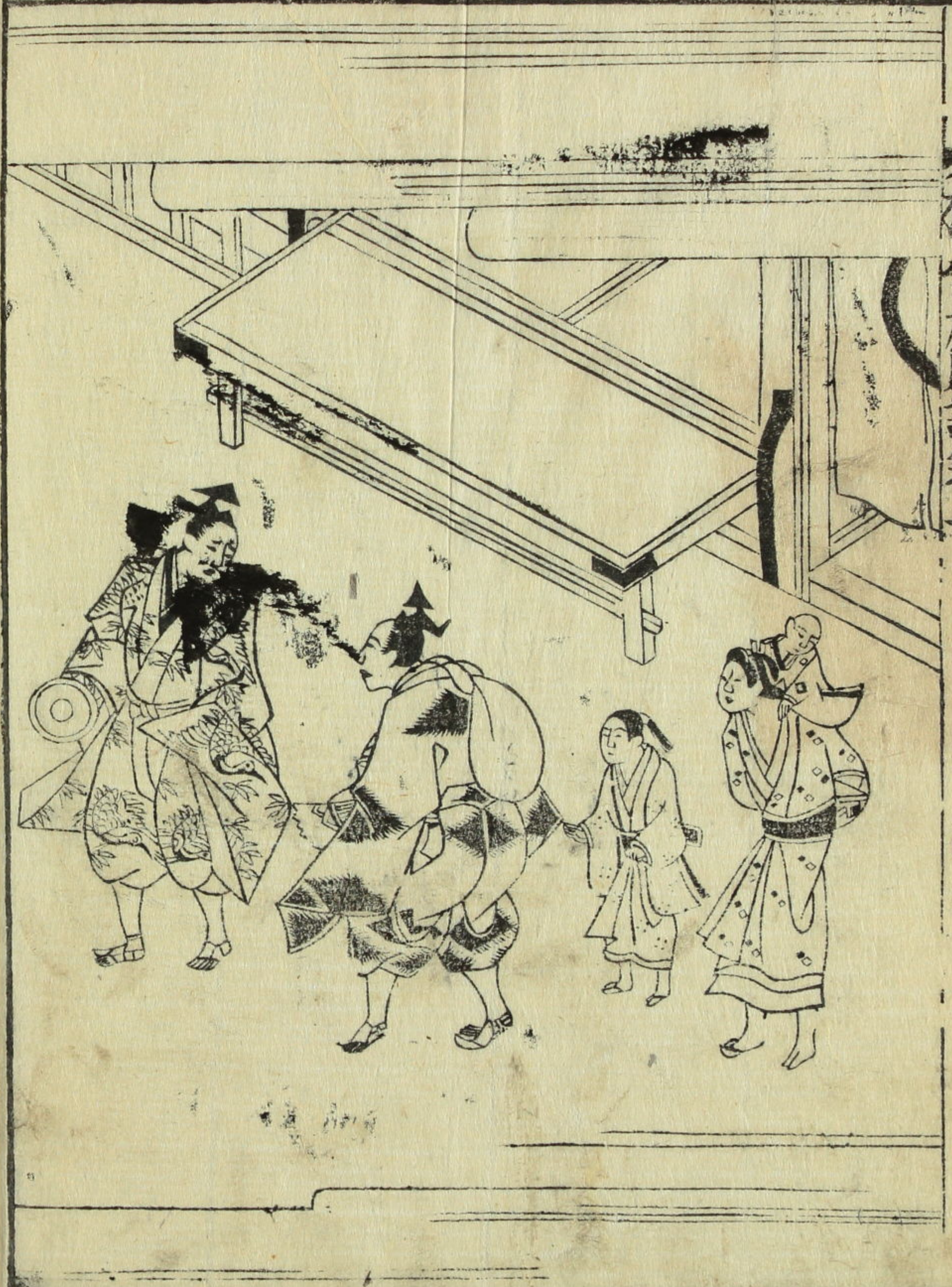
いふくはらんちの呪えれは禊くいそ日々
中よあわき際ぬれく爆竹すゆり教中
筆よ更るはまといひて爆竹志
呪よつたはこれより妖業乃事やそい
あここの教後といふく又更ハ爆竹乃教事と
降うまの志理あり志あが

○今釣小豆粥と煮て饘とすへてこれと今
湯の細その枕あみよ十日かりらるめれせ
ふしかけをいし軍をり寛平の比より初
とら又七粒丸粥といつハ米粟赤多禱よ

御茶屋



御茶屋



胡麻子小豆也と延壽或は刀をえり又九條右座
おれ記の白飯まめあつと薬栗柿さげを
かりしとちりせり正月の地葉粥防風粥栗糰粥
をいとしとを人よるあしと少事 中全月
今よこえたり

世風記の正月十五日小豆粥と煮く天狗粥と
かりす庭中と栗と垂る餅と粥とちり
その粥凝付た者ふじりい毎ねも踏して乞
とねもむ六夜をそとつり以外後毒法
記別歌叔の兵死をよとゆく分ははとよれ

妖をたははらして信ずるまたす玉婿を
一二月十日膏粥とばりて一戸とちり
とちりせり又煎き栗は記を二月十日
糜とけりて油膏とろのうへよくつと
ちりてとちりせり肝令おち玉糰とちり
あつとちりせり信をあん授とちり

○今日祖志考姓乃靈節よ薬酒とちり新果
とすむへ一毎月十日のちり
とちりせり一とねまの書又ちりあちり
○枕あふとちり十日のちりあちりかして

一に女房の君のりりきき
 家だこころ女中をみだうをなうたれど
 一してはねようしるさつらひ志すりき
 たりしふいぎとてなまらわらんうらりて
 けうけうわりとうららひなるも定て
 一し又袂衣中たもとに巻よしく年をかりぬ
 せりおのふふとくまかこむむいかり
 ねりまきもの強杖つえ引くつこまきうらひ
 ままうぬまうとまうりつらまきぬひ
 どりおのくかううらめしくね包かひ紐ひふ
 粥かゆのねおちち車くるま下くだ敷ふ中ちゆうみくも粥かゆ杖つえ

少く女房とてい歌みとまはそらうのたり
 越前えちぜんをとおのこしくまとなり 軒文のりの志く
 まるまうしりまう 今日粥杖かゆつえとて松枝まつえ茶ちやか
 せりし女代にしろ橋はしとていおとうじまとなひ
 とていしりまきりあり他今たけいまの思おも乃の成なり
 車くるまとちのて男おとこれとふおをむくうて
 修しゆまたすまなひ女にむすめとら作しやうあり小團こだんのハ
 松まつ枝えと又また女にむすめといろりてろまかく女にむすめと打
 西にしあり西にし國くにの橋はしあり女にむすめとらつ西にしあり
 小こ女にむすめといり今日けふの婦つま人ひと女にむすめまお又また出でたれなりう

樽桑原原言卷二

七

やうくうのそふ兄その西月禁下てんと
あやまひへく決

○今秋ハ一年十二夜ハ圓月ハ始まりあま
ら所くん人かき管れ月ハ既始ハ一事うわ
高波の妻玉入人ハ臨堂ふく妻取れ月と
そてあうび春月良勝め秋月色好月色
令人懐慘喜月色令人和悦といひ一事
趙酒辭の候録録よんてりハ載集の上西
門院也

花はのろよひるけりよ妻ハ秋のこおの

月をんくうりきり 新古今集よ大に千里

てりもせひくものもえく娘妻れ秋のゆら
月夜ふ志くものろあま

○今夕妻娘乃交とら事と忘れ之喜命と換
すし月令廣教よんてり

十六日 國信は日遊樂と事とす

お籠りよ有魯の人多く正月十六日とあま
奇観ふあそぶこれと走る橋といふとゆらぬ
そろこーもい日遊樂とらりあうまや

○又今日至然おらぬ婢ハ宿居 俗よあやまりく
やうりといふ

一箇列卿... 恒念... 撰

五紅春酒香

吾... 親戚... 兄... 弟... 外

は月元日... 時... 世... 小... 歳... 徳... 々々

徳... 方... 一... 年... の

乃... 使... 乃... 方... 十... 十... 千... 此

剛... 又... と... 海... 徳... 一... 十... 甲... 酉... 戌... 庚... 壬... 此... 方... 一... 又... と... 法

言... 甲... 乃... 方... 一... 是... 酉... の... 衆... 徳... 々... 南... 又... 酉... 乃... 方... 一

在... 戌... の... 衆... 徳... 々... 中... 又... 戌... 乃... 方... 一... 又... 庚... の... 衆... 徳... 々... 乃... 方... 一... 又... 壬... 乃

方... 小... 又... 一... 乙... 乃... 衆... 徳... 々... 乃... 方... 一... 又... 乙... 丁... 己... 辛

乃... 衆... 徳... 々... 乃... 方... 一... 又... 乙... 丁... 己... 辛

乃... 衆... 徳... 々... 乃... 方... 一... 又... 乙... 丁... 己... 辛

日月の爲とてつるあり揚とる又月礼大宮佐
 以美宗祀日月星辰各義云云日於壇祭月於
 坎楊氏云春分朝日始夕月北祭日月之西
 終也賈誼保傅傳云三代之礼天子喜朝日秋
 暮夕月鄭氏云冬日也壇祭月西壇禮氏云朝
 日以朝夕月暮禮迎其初出也日月爲此事一於杜大
 通典又於通考云
 これら天の日月の爲とてつる事とてつる事
 朝之人皇又十二代後孫天皇乃神時天皇志勢の
 以若ふとらとて神氏の祀春日大明神より二十四
 代乃孫智治丸とて社智の勅命ありとて玉璽の

事とてつる事とてつる事とてつる事
 とちとてつる事とてつる事とてつる事
 今乃世俗士庶人よりつる事とてつる事
 とつる事とてつる事とてつる事とてつる事
 つる事とてつる事とてつる事とてつる事
 て日月とつる事とてつる事とてつる事
 志記の何事なりこれ又人やびつる事
 夫若氏の天乃禮樂と惜つる事とてつる事
 舞せしとてつる事とてつる事とてつる事
 舞くといつる事とてつる事とてつる事

とんや日月と徹燧乃あまきあまきや地終のあ
とぬ日月をあらざりかろく一ぬ福とあんと
あや神や地終とうけ終る人ふ福とあんと
あしんや王割又天子のまじり花信の社饗
とありたまひぬ祀とあるとり一ぬと一ぬ
おと二祀と三唐人の一祀と三これ祀乃中ふ
て二祀とありあの一祀をあるとり一又三祀
おんえり上いよとぬあり車とぬ下の上
と備する事とぬとあるまふよりすし
天如日月といふるくく唐史云如日月といれ

あしんや一ぬとあるとり一ぬとあるとり
久しといふもなんそあやりくぬとあるとり
唐史又神道家の説より日終といふ天如日月と
あしんや月終といふ説もあしんや
と無き神を日の神月終より月乃神とあるとり
とありも一ぬ 邦乃法よとあるとり日月終
あせんとあるとり一ぬ 先体居奇裁し事ぬ
起るく神終といふ家日とあるとり夕月とあ
とあるとり日終あしんやの神日とあるとり月とあ
はふり十ぬ終と用ぬ一ぬとあるとり

おのりの理よわくき害あつて一に身を修
具とてふ人邪位と後とて一に天子にあらず
去る日月と去る車のおろく言は道程あり
凡此終れまるとなる人の福をくくして思ひて
福ありとてんや天路日月と遊戯乃家よをり
とや我日月と久一を去る人と月るふ忠は福
おほくともありとも身とみ縁とて保つるものもろ
天路神明の如くも常なきたかぬと世人と
一に路よみの何くも去るれどもおののどとて借あ
りあつたなりをたむかじう不善よとていひてん

乃道程なりくんわとるれば一むいん車あり
又傍姫命世紀の神さとうけく神よつうち道
と法くよとてんあつてく佛法乃息と去りて身
て邪明と再あしまれとてりまれの神の如く
佛法と云はれお理あふあよびししり位執かた
邪言の因お二重とて小僧尼のともぐれは邪言
とゆりされす去りのともあつて延表或伊勢奇文
乃三烟と佛と中子といひ経と後紙といひ塔と
あつていふとい寺と有るといひ信と誓と
といひ尼と女髪と云齋と片膳といひこれと肉

小取のきり程りとて去るざらるやとんや庚
申とちとハ鳥乃義ありあらず此程の
らびて鶴明よりとらとよ今母の儀これと
あふと懺念とすまうとて庚申とあると程と
あやまりの上は阿摩りあるべし又吾邦
あま庚申ハ徳田大邦乃司と新日あま
也大邦とまらりしを信まてこれ又
附會の儀あり又庚申金あり申を金なり
金と金と刻する日あまつくしと日あり
しあま中ふ土と入ておまはるるとる

是又懺念あり己約のお刻とて庚申
あまやうたの久保よ理あま事あまが
あまゆるたが流儀とまらるは物終妖あま乃
るやと考まはる可ありまれば柳子厚と
と懺念あり吾剛頼と勢信あり経家繪柳
り文に跋とらあり又信史既よ庚申乃金と
歴此程法中て親氏をゆがう次と去るせり
浮屠とらる代姫あま事と知くかくとらる
群像採信よ子厚と文と剛頼と信よりて信
あま又は物阿のしとていふの誤又笑に堪らる

中若の経目よ味珍りてく爾雅よ経題ハ菌奴
 也といへり又考工記乃注よ経業ハ推乃名あり
 中乃てり菌推の形小似り推又菌の形よ
 似れい名と同す俗よ称乃一推と執る鬼と
 うつ圖と畫て寂経題とらづく事と好むよ
 因て経題の傳と他てこれ新第乃録出とく
 鬼と嗜ふといふ通よありとありてこれ
 一〇〇
 経題凡る時珍り後とてく爾後とすべし
 新編史乃録いごきハ新編あり何ぞを

まらよ堪んや考く書と修せば書方記ふ考
 じとてのうもむぢあるれ
 又中朝少くハ元と大師とて意意傳の傳と考
 てつたよとつて邪痛と考せぐまじあひたり
 けし少く俗人乃家とてんもるるあり意意
 小意と傳の傳と考くハ民屋の押ハかの
 俗傳何後とて考く考とらつて考く考く考
 新傳と考く考く考く考く考く考く考く考
 ンと又考く考と考く考と考く考と考く考
 考く考く考く考く考く考く考く考く考く考

何くそひ弱し逆とまむび程明らるるべとの
けりくろくたきあともろく

八月榎木と梅敷へ一西日と木とゆるゆる上射す

きた書し刃えり枝と切く地は挿し此月

し一又花茶と梅敷のまげ月あふし一合

廣義よりしてりくへるる氣を乃氣とゆるけ

生活とらあるや岩政を書よとく九徳が本

と樹るふ下弦の後上弦の最す

八月と梅桑八月は清く堂あり樹とて知り

氣や空たり何木の生草金く枝葉よりあり

好せばをも性とやうの梅木とれべも木とやう

又よく元果本とうゆるみ先九月乃中枝後

樹れまうりと樹く繩とゆるまうりとかきわり

らりあしあ肥土と入水と渡へ一次年正月二月

うらうらゆる一梅敷の時と中分を梅とて

ちとつとあてくも一とよやうらうらとちと加え

地面より二三可たうとまうらとちととるにた

く垂るく流敷くのら半月かとい毎の氷と流

八月柳乃枝と切て地は挿し速く梅敷とて月を廣

義よりえり元は月枝と挿て可あり本の枝

歌陽の梅の花情よ

激流紅白宜和間。先後仍須流。我欲何成
橋酒去。其數一日不花開。

楊梅齋の梅の花情よ

三返初開是梅卿。再開三返首剛明。梅尚奄有
之。連一返花開一返次。

趙白雲の載仁杏情よ

白髮梅根送。送送何年及見子。垂老本但欲
添培植。不同園花結子時。

四月を致生れ初あり。在よ本とらるる。たのむる

葉とくひがひのあり。連まらむ。たのむる

むすれり。抽ひまらむ。然りま。とまらひ。まら

い事。月念よ。及えたり。育子のま。とく。樹木。以。時。代。ま

禽。然。以。時。報。曾。弘。子。乃。日。秋。一。樹。教。一。獸。不。以。其

時。此。孝。也。ら。れ。孝。義。よ。あ。下。り。本。と。ま。り。報。く。ま

と。不。時。と。ま。り。世。下。り。を。不。他。の。ま。は。と。れ。ら。あ。ま

天。地。乃。不。孝。あり。と。ま。り。ま。ら。り。

遠。生。緑。よ。ま。く。懸。懸。乃。月。天。地。變。始。乃。他。ま。ら

ある。固。密。し。て。志。勤。と。泄。ま。り。な。り。ま

以。月。狸。肉。と。ま。り。ハ。報。と。や。梅。の。夢。と。ま。り。ハ。腎。と。ま。り

日本書紀卷之三

二月

二月の果名 仲春 如月 今月
仲春と云ふは二月の果名也
仲春 如月 今月
仲春と云ふは二月の果名也
仲春 如月 今月

朔日 中和節と云ふ

二日 今日と初朔と云ふは陰陽記に乃云ふ

○孟子の生れ日あり 孟母考より周此定王
二千七百四年二月孟母生れ

今二月二方あり

○國俗奴婢と云ふ今月より本年二月二日まてと

今月より本年二月二日まてと
今月より本年二月二日まてと
今月より本年二月二日まてと

志く居る元奴婢と教ふる縁乃かあるよその控へ
 す又才獨りそののとあれづらよ好むか人の習
 けで才ある志いふにせまねなきいたく徳を分
 るそのと控へ臍他りいしく買奴婢必 毎才有りて使
 令ふよかれひるもれい多くい奸曲するもわ
 乃古に後よ上等のるよりいち考れんとつと
 どのをもひきまひり又此の已い雙奴を供へる
 下賤乃その年久しき流にづらあす才なきに
 ていれこよりれたとりてあやまら多よよのあり
 約と一年と定めりその人不好を去年と供へ

八日 秋迦佛の生日あり佛祖統紀は周北昭王二十
 四年四月八日秋迦仙生とあり但周天子の月とて
 西月とされは西月の今乃二月又苗まり淳屠民から
 事と考どして夏西の四月とらゆのいひ
 事ありと古人の後ふんえり
 十五日 提要録ふ今日と也約といふ書乃のれ中
 百衣競ひ昇く何分なればこそ是は越貴と
 ころあり八月又衣秋の氣中るまの月夕
 と号しそ月と貴するころとらへり
 ○佛家ある今日秋迦入滅の日とて涅槃會とあり

考れざるは又月建と考ゆべきに據るは破邪
論に周礼穆王五十二年二月十五日佛涅槃す記
せり月の二月に今此十二月ありと云ふは今十二月
十五日と云く佛涅槃すま

十八日孔子の卒一節小日記り 孔子の生卒乃日夜徳より
これハ孔子の卒なり

二十九日 比治艾翁と田所よ掃しぬむ市
ふへ一上己の草履と云ふあり来地所人
農まも扱あり

休日沐浴

考れぬ日夜の長さひくく一は河あり一は海あり
考れぬ日夜の長さひくく一は河あり一は海あり
日入る考れぬ二か半と昏とす昏は合て半の
夜は属はくともるは明りあること昏に
これハ日夜ひくく一は河と一は海とあり日夜
考れぬ一陽と一陰と一は湯と一は水と一は火と一は土と
考れぬ一考れぬ一は考れぬ一は考れぬ一は考れぬ
考れぬ一考れぬ一は考れぬ一は考れぬ一は考れぬ
考れぬ一考れぬ一は考れぬ一は考れぬ一は考れぬ

いふ一六た考妣とまつる強公ハ皆祖より山下と
あり程子の言祖より山下とあり一と一の言は
儀とはすすいそ思とむくゆり乃義あり父母之祖
を我身の根本なりと云ふは其條よふ記して
時といふこれと云ふを遠とて述れん也公曰一年
又又日有り空付と日有り空付乃其ハ仲夏
用ゆ一其ハ夏ハ秋ハ冬ハあり其條二
まつるも可なり忌日ハ死日あり一年は只一日也
和俗これと祥月と云ふ毎月の月忌を古語より
日本少く申はるがとれり此も厚に記す

素食と云ハ可なり春秋乃祭と忌日ハ其ハ何
一ハ身戒一平生食と後とてつた約儀を
と物一日本ハ其ハ何と云ハ蓋蓋邊
豆ハ穀類と用ゆ一は只考妣祖先の目
たる物と用ゆ一又其ハ何と云ハ其ハ肉
食と用ゆれど日本少く今其魚を其肉食と
とて其ハ何國俗よ其ハ何國俗ハ何
古語よ其ハ何人ハ其ハ何と考用ハ何
土俗と其ハ何一古語よ其ハ何國俗
ろむく其ハ何一

土をよく^{たか}^{たか}と^{たか}ひ又穀と^{たか}生^{たか}は故よ^{たか}あつ^{たか}まゝの^{たか}農
 事^{たか}れより^{たか}ん^{たか}り^{たか}と^{たか}め^{たか}の^{たか}種^{たか}は^{たか}れ^{たか}穀^{たか}と^{たか}種^{たか}す^{たか}る^{たか}こ
 と^{たか}も^{たか}ん^{たか}その^{たか}日^{たか}の^{たか}立^{たか}て^{たか}乃^{たか}後^{たか}米^{たか}の^{たか}成^{たか}れ^{たか}日^{たか}と^{たか}種^{たか}す^{たか}る^{たか}
 立^{たか}た^{たか}れ^{たか}後^{たか}米^{たか}の^{たか}成^{たか}れ^{たか}日^{たか}と^{たか}種^{たか}す^{たか}る^{たか}
十日の甲戌己未たり
命よき始より成の
日と月 種^{たか}記^{たか}を^{たか}仲^{たか}春^{たか}推^{たか}元^{たか}日^{たか}命^{たか}民^{たか}社^{たか}と^{たか}仰^{たか}り
元日ハ吉日
の事なり 風^{たか}俗^{たか}通^{たか}ふ^{たか}そ^{たか}く^{たか}若^{たか}工^{たか}れ^{たか}子^{たか}と^{たか}脩^{たか}く^{たか}よ^{たか}聖^{たか}徳^{たか}と^{たか}た^{たか}れ^{たか}そ
 舟^{たか}車^{たか}乃^{たか}多^{たか}り^{たか}そ^{たか}り^{たか}是^{たか}改^{たか}れ^{たか}運^{たか}の^{たか}乃^{たか}と^{たか}海^{たか}宿^{たか}便^{たか}す^{たか}
 乃^{たか}そ^{たか}か^{たか}一^{たか}あ^{たか}り^{たか}て^{たか}社^{たか}神^{たか}と^{たか}す^{たか}る^{たか}徳^{たか}よ^{たか}そ^{たか}く^{たか}若^{たか}工
 氏^{たか}子^{たか}何^{たか}一^{たか}旬^{たか}純^{たか}氏^{たか}と^{たか}よ^{たか}平^{たか}水^{たか}土^{たか}有^{たか}小^{たか}祀^{たか}て^{たか}い^{たか}そ^{たか}社^{たか}の^{たか}氏^{たか}
 張^{たか}元^{たか}郊^{たか}特^{たか}牲^{たか}小^{たか}厲^{たか}之^{たか}氏^{たか}乃^{たか}天^{たか}下^{たか}と^{たか}は^{たか}乃^{たか}時^{たか}り^{たか}れ^{たか}そ^{たか}と

農^{たか}と^{たか}い^{たか}よ^{たか}そ^{たか}く^{たか}百^{たか}穀^{たか}と^{たか}い^{たか}の^{たか}夏^{たか}代^{たか}衰^{たか}る^{たか}よ^{たか}乃^{たか}そ^{たか}周^{たか}乃^{たか}
 棄^{たか}繼^{たか}之^{たか}有^{たか}り^{たか}祀^{たか}く^{たか}い^{たか}て^{たか}稷^{たか}と^{たか}す^{たか}共^{たか}工^{たか}氏^{たか}の^{たか}九^{たか}刑^{たか}一^{たか}
 覇^{たか}乃^{たか}所^{たか}を^{たか}の^{たか}あ^{たか}と^{たか}后^{たか}と^{たか}い^{たか}よ^{たか}そ^{たか}く^{たか}九^{たか}刑^{たか}と^{たか}平^{たか}ぐ^{たか}有^{たか}り^{たか}
 祀^{たか}て^{たか}い^{たか}そ^{たか}社^{たか}と^{たか}す^{たか}い^{たか}乃^{たか}り^{たか}
益邑のそく棄百穀と檣の
稷を百穀のそく棄とす 乃^{たか}れ^{たか}社^{たか}を^{たか}土^{たか}神^{たか}あり^{たか}稷^{たか}ハ^{たか}穀^{たか}神^{たか}あり^{たか}土^{たか}穀^{たか}
 乃^{たか}神^{たか}と^{たか}あ^{たか}り^{たか}そ^{たか}人^{たか}氏^{たか}と^{たか}生^{たか}を^{たか}あ^{たか}す^{たか}る^{たか}有^{たか}り^{たか}そ^{たか}乃^{たか}
 一^{たか}一^{たか}の^{たか}社^{たか}日^{たか}の^{たか}村^{たか}民^{たか}た^{たか}が^{たか}い^{たか}よ^{たか}東^{たか}行^{たか}て^{たか}酒^{たか}食^{たか}ふ^{たか}
 酸^{たか}飽^{たか}と^{たか}れ^{たか}い^{たか}ん^{たか}え^{たか}り^{たか}張^{たか}演^{たか}の^{たか}社^{たか}乃^{たか}得^{たか}事^{たか}也^{たか}あ^{たか}く^{たか}技^{たか}
 以^{たか}醉^{たか}人^{たか}得^{たか}と^{たか}也^{たか}也^{たか}り^{たか}又^{たか}け^{たか}日^{たか}代^{たか}酒^{たか}と^{たか}糝^{たか}と^{たか}治^{たか}む^{たか}
 有^{たか}り^{たか}酒^{たか}と^{たか}多^{たか}づ^{たか}て^{たか}海^{たか}程^{たか}事^{たか}と^{たか}え^{たか}い^{たか}乃^{たか}り^{たか}

うゆらふまをわたり又よくい月法果木に塔へー
 げ月法葎根と搗き收むし沈む中より根を
 多く古法葎葉と搗りよ多く二月八月と用ひこれ
 酒よまの薬の根二月の葉に茅一八月末苗よ
 根とあよするよ根より少くても此の薬しきり
 良附と世の大率根と用ひ物を宿根の葎葉を
 附より一津澤をぬくの根よゆして何よびたりこれと
 飯人とすむ葎落地葉とよくかよ苗か記附これに
 実して沈むあり苗有り附し世人虚志く陰有りその者
 根より物よとれしら苗か身くよまの薬有りその附り

へーとれつら根生ぶるう己よ是てまのゆかき
 今葉まの葉よむ開りざり附これすかたら根を解ひ
 津しよまの葉の根よこ懸く懸しこれをも解有り
 葉と用ひ物よ初く長足する附り葉と用ひ物
 葉乃あり附りよ葉と用ひ物よ初く葉の附りよ取
 実と用ひ物よの葉と成すに記取これ附りよ附月
 とひすくろよ葉土氣よ喰有り天附懸休あり互地
 三月よ花有りその葉乃中よまよかから四月よむ
 ひくろくろよ白葉よ大葉有りよつく人百四月
 芽葉ありよ葉の葉始盛開これ考解有り

三月八日癸疾とぬと梨子と食ふケル九日大森と
 一人をりて氣あざぐくむ小森とくく人乃
 志性とわゆり最生と食うと忌又陸地の流泉
 を飲くとくは瘧瘴とぬ月令廣義書貴
 二月乃古候才一柁於兼才二倉庚時才三智化乃
 乃古藝乃三候あり才四玄智乃才五雷乃
 乃古藝ハ晝四十七刻又十分夜五十二刻十分春分
 乃古四十刻夜五十二刻 月令廣義

三月

節と海命と中と教勅と云〇三月の庚名 季夏病月
 蠶卵 徳と姑御と云〇三月乃和名と海とノ東
 にそく風ありくすうて春の末とくあり
 三月乃やが八月と云と雲ありき

二日沐浴 艾膳くと藝すへ
 三日今日と重くと云又と云よよ初と云也
 四月一乃三月初乃己の日と云と色す 月令
 辰六月を己と己と陰日とす不祥と云くさなり
 沈約と宋書と魏より以後二月と用と己乃日と
 拘りて云と云りゆと今日文雅と食 桃花酒と
 乃と文雅と親戚とと云
 今日文雅とくくと考くと前楚景射代り

三月三日鼠麴乃汁とみく蜜と合じ粉と和す
 名付て麴粉音極米とよみこれと食と並に厭討
 氣と名付せり又中らふ鼠麴調中山使除痰塵
 疔去熱嗽雜米粉合甜美ありと有りこれとて
 凡重いもの一と鼠麴使と用ひく之をとり又
 文徳家縁才一書と田知と多有り後と母と考を
 名づく二月は始く生ひ葦葉に研してを飲し三月
 二りの婦女それとみく蒸し搗きて使はすは
 えと兼うとのと有り志られハ我 國中一六
 鼠麴使と用ひくはと有り乃比より鼠麴と

用ひくして艾と用ひたりしとや又綿繭を紙を
 小のらと周乃歯王ハ時或人草餅を汁うて歯
 王よなは毒まらハ味の美たうとと考してこれ
 餅は地あり家麻と批せ周乃世大と治り逐よ
 本平と致へしと有り海人ハ事とお傳く三月
 二りの草餅を依り粗盡にともむ草餅のさうは
 たりたりとされりともん志るもは後たりたりか
 可と乃びくとも毒まれりしとてはとて草
 餅くすしとさうしとありはた汁會乃後たりし
 位よりいとも毒まれりはとて中より一と批る

へのむ事月令座敷は法天生を引てんく二百種
 花とぬきく湯よひくくこれとのめ病と除る病を
 花うらひのちん枕花を湯よ浸さひひとあるはと
 用へし中冬乃花と服され鼻血ひてくやまひく
 中冬よのちんえより

〇そあつて六倍節よ考姓先征乃律主はあつ合
 とくくむる禮あり世國乃人とかぬすひの百事か
 たり倍節よえりれ外上巳後午星文中元節湯を
 乃敷たりとれ世俗の業すの財行てよめくろれ節地
 時食もよく考姓一宴樂は志るる考姓先征よすあ

ぶはひんよくろよりひ又豈死よ事ら事せよあり
 りあくく亡に事らてね事らうてくもろ乃ささかん
 やあゆいをも財代果蔬もの類也時食くの上巳の
 草履端午乃粽中元乃蓮葉飯中湯の菊湯菓子
 飯の類ありとと整よもりて盡事は飯之く一月
 初よ雜煮とととひり種れく

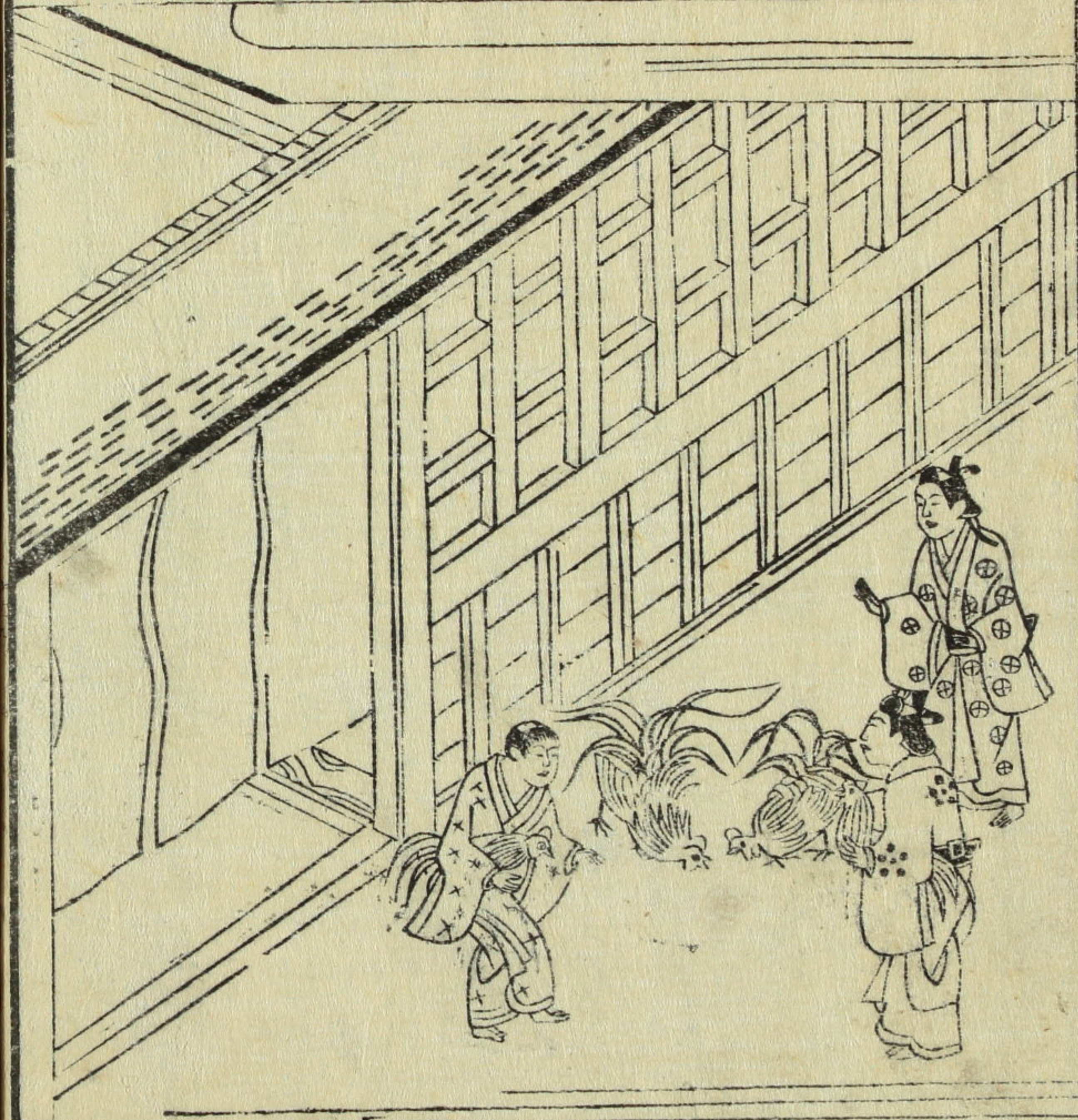
〇のあへん今日曲水乃宴とるのちん川乃上よ遠
 一後後志く流水の筋とくろくれ杯のあ茶とと
 ざりははよ矯くと他くくその杯と酒とくけく飲
 くら事あり酒筋と酒とをどくろくはは事あり

續齊書紀略云々 晉乃武帝尚書執事虞之問
云々 二日の曲水を義何とり扱や執事虞討て
漢代章帝乃内平系代徐肇二月初と云々 三人
乃女とせし二日よりて三人も小あぬ一村
のん心く怪してこれと云漢は携持て鹽洗
し遂は流水は多と云てこれとのむぬは宴
あゝの起より帝のそくは後のとくちくは後事
はわりす尚書郎東督二と云とけくそく執事
少生しんがとれと云んやむし周公ト云く後
邑と云し海みに國く危と云ふあは逸は云く

羽觴流波又秦代昭王二月と云密酒何如令人
て多而たり出水の初と持ていそく令君割育西
及秦乃霸法侯因此立為曲水並後漢と云り
お詔くこれ書事との帝乃と云善金中并と
東都の賜ひ執事虞と云遷去く陽城乃令と云
と云ん云れと東督の言と又一村の附合り云
けと云に云い又凡立記を後漢の鄭虞と云
とわけたりしより後漢書禮儀志と三月と已友民
益獲飲于車流水と云り云く漢代何と云これり
りり鄭虞と云と云あは云く鄭乃國の俗

二月と己乃日蘭とありに宗く石祥と被除と成り
 諸経代郵風より入る言者も清り活するも強後
 仍れ入る代始之より一事なり
蕭穎士撰飲序撰也
 狹也郵風者之蓋取法
 句萌食区陽氣敷也握芳蘭臨清川乘和瀛溟用徽介社甚深
 矣海文梓魯令三月宴序云酒食出于野曰禊飲古俗也
 我朝ゆき水乃宴とけりて事孔宗天宮に
 御宇より始りてさうはせを宗國も曲め
 乃家の初儀るるも人をも中儀えたる也
 徳樂合梅は日本三月三日者桃花水宴と云
 新後吉今よ定家は女も妻乃奇り
 此よりあまきや辱しむるも之あるなり

あつた代さうの又とらああ合よ之あひ
 切行ひのあははあさゆらとたな
 ちさうよあをたまり
 ○又今日諸合さうりあり世後必をさうくもろ
 乃事りや明るる戸清りたもあまは能と剛志あは
 一にかたたく修よつて修りて少兒あふ人とあひ
 治結坊とあふとまも難とつてせりてあひ又あ
 明皇の百の年せりてあは剛志とあひ
 一より東津もあひてそのこへり
 今按るとんれ唐のあは事なり東城は老僧



梅子屋敷言卷

十一

ことし書よわたり玉燭玉典よ冬食乃常城市
 各難と關一めく感くはとつり又漢明代の語
 とたろくし先てぬりもきしとや信りたよ
 とつる感乃驚きの有幸も清心のり此事キリ
 かく事しとて我 國子を日難合とらしやあえ
 關結此事もた信よ及んえ信れいけし下りまき
 〇は日艾と九絨と戸ようけ風ふけし事一國て
 よしし平金月今よ及より又増年よ及もすあり
 〇今日めれわくとのぬり事よいぬかりきひえ
 しらきた人形とりあうねうけりむかきあうびの

事と源氏物語をくくを及ん信れへあし一より
 一より又源氏よ十又信りぬり人いひかれ
 ひいよとくものよあきと十よりうらやよ家
 事キし又遠よとく事と人形も衣振とぬり
 て二世帯あきせとこれとてあきするあり
 信氏よ及ん方あまうははるるあし
 信りた事あり抄よわまうのハ三葉よこれと再のちあり
 信りたこととあきとく事と乃うけつたれ物なりとナリ
 晦日体信 今日と三月終りよあきし春ハ湯餅乃四
 けして天守融りよ昔も木ぬきし信りた事同人の
 無氣を和暢とらとるぬハ尤貴遊しとて完くさる

かゝ次去とさうさふとまはればつる日をまじで郊野
おろそひふ岳小宅係して詠老と羨一春と
身一後撰集一丸河内那恒二奇
くれてさしつひとふたはまの目と花のまき
ふふさくさん 玉簪集に二月先れんと大徳の
あますすくわくしてあふる乃後とまじ
とあいつくせん 又お大徳云お徳のまじ
あふるゆくとまはさくはあふるまじ
まじらひまじ

賈島の三月晦日照劉評更詩

三月晦日二十日風芝別我苦吟身世忘今夜不
須睡未眠曉鐘猶是春

清明三月 たり二日茶乃日とを食と云い日ろろ一六毎
先此れ墓所と掃塗してあまとなひさのゆくと
これらう一とら乃風俗をらさう徳子理窟一やく
念と十月朔日展墓不可為子本初生初死と云は
古徳志ありくはげ日徳先乃墓所よりてお坊
一の事よとら

は月親戚及交友と宴す人一丸審と食とる幸 かり
てあま一と豊約るれ可以南久一主人乃と云ふ

害と老教一々警養とみひくは又舊書に
て禮と失くす又海とわかくまをく人びく
先礼よ及有るは世俗親戚男女と客とる不替
と扱ぐ淫樂を強む人情と海一は宮とま
政子毛るは已し一は修まきくらんをく平
徳徳樂をくちち介をくく

三月月天をくく日と一ある殿宅とま
と修造一或茶屋と茶改板屋と修葺と一

二月治屋室の初春と田舎暦も記す
は月菜蔬花多よ菜菜も種一或後よ菊苗三月

初又ハ中旬よりえてくちをれは
南風蜀黍玉蜀黍芒花烏芋紅豆黒豆豌豆菜豆扁
豆赤豆刀豆胡麻薑眉兒豆黍石竹地黃草麻子
荊芥香薷をくは月乃菜のくく
紅豆々二月の中より初春種と一又月の菜豆
やうくくゆと一は菜のくく久一地
まかよりゆと一は菜蔬とゆと一
くちをれはくちをれはくちをれは
りゆあり又その地氣ハ寒暖に
りく一又は月本と持一松橋相補香櫨乃影

清明乃あ後、持ててうしと月令度義よりなり

日くさ藤と九斗して所よりまむせ日よかーさハめく

かひう一原と洗きて又日にけし、收垂てー食らる何

湯よひさーつらるが月め或うく養と用の乞書光

新書乃後より、玄垣淹けして筆へー垣殿ハ乾藤

まうされりいんとなまの垣敷ハ用やとー干藤を

野くまゝ備は用ひるー又藤も狗脊も垣淹り

元新のゆりると、ちまよ乃後七午又日と期とまろりー春

並好り書よ乃ゆると今世教部乃ひとるあ橋を

ままれ後六十日とひく登れ部す、吉野、山中

た、まうてまま乃後六午又日とひく花候より年

乃新藤により、山山下ゆりるとまろりー連遊阿

るも大やうたがりのま良ま部乃ハを橋をひとく

橋よ十日あまりかろー奥とまろりの上ハ五地

より、花候とまろりさろり一旬二旬或一月也

化和寺ハ橋ハ法中より、戸かまろりく、藤るさ、雄托橋

無仁和寺乃ゆく、まろりかろりたろり

此月小蒜及雛子と食らる、次又身歎乃又藤と食

事なろり、生藤障、麻肉と食らる、凍蓮とろり

瘡毒、熱病と食らる、遊とろり、祓と食らる

月令度義より、まろりまろり

強^{つく}ま^んく^くの^くく^くと^殺ま^るる^くく^くして^天透^す水^{みづ}を
あ^らか^ま命^{いのち}と^近し^むる^くの^ん黄^{わう}花^か菜^{さい}と^食ひ^やら^ると
魚^{いさな}鱈^{たら}と^食ひ^やら^る化^{くわ}せ^ざれ^ば宿^{しゆく}疾^{ぢやく}を^とぬ^り

二月乃古候才一桐始^{はつ}新^{しん}才二回^に鼠^{ねずみ}化^{くわ}為^な男^{おとこ}才三^{さん}回^{かい}始^{はつ}
見^みた^ら清^{せい}明^{めい}の^に候^うち^り才^は江^え洋^{やう}始^{はつ}生^{なま}才^は吹^ふ雪^{ゆき}排^{はい}
長^{なが}才^は六^む載^{さい}勝^{しょう}降^{かう}于^に桑^{くわ}才^は教^{きやく}ぬ^りの^に候^うち^り

清^{せい}明^{めい}八^{はち}昼^{ひる}五^ご十二^{じふに}刻^{こく}十^{じゆ}分^{ぶん}夜^よ四^し十七^{じふしち}刻^{こく}五^ご十分^{じふぶん}殺^{ころ}ぬ^り
至^{いた}五^ご十^{じゆ}四^し刻^{こく}十^{じゆ}分^{ぶん}夜^よ四^し五^ご刻^{こく}五^ご十分^{じふぶん}月^{つき}令^{しやう}慶^{けい}義^ぎ

日本^{にっぽん}異^い時^じ記^き卷^{まき}之^の三^{さん}畢^{ひつ}

